



第91号 (季刊)
平成21年7月
田中野田町内会

<http://townweb.e-okayamacity.jp/tanakanoda/>

「大いなる和の国」の精神

田中野田町内会
会長 和気 健

先日目にした雑誌に心を打たれた記事があったので、少し紹介したいとおもいます。

高層ビルのレストランで、アメリカから来た老夫妻との食事を終えて、廊下に出ると、雨が降り出していた。廊下から外を見下ろすと、そこはハチ公広場前の大きなスクランブル交差点で、信号が青になると色とりどりの雨傘がひしめいていた。老夫妻は足をとめ、じっと窓から見下ろした。

「私たち、こうするのが大好きなの。日本のことが一番よくわかるから。」「雨の日、そしてことに渋谷のような大きな交差点。」「ほら、あちこちの方向へ動く傘をよく見てごらん下さい。」「ぶつかったり、押し合ったりしないでしょ?」「パレエの舞台の群舞みたいに、規則正しくゆずり合って滑って行く。」「演出家がいるかのように、これだけの数の傘が集まれば、こんな光景はよそでは決して見られない。」

この言葉に、海外に合計15年も住んでいた文筆家の加藤恭子氏は、内なる「外の眼」を意識している私も、ここまでは気づかなかった。いつもせかせかと急いでいる私は、「傘の群舞」に眼をとめたことすらなかったと言います。

日本人には「せかせかとした雑踏」としか見えないうスクランブル交差点で入り乱れる傘の群れを、この老夫妻は「規則正しくゆずり合って滑って行く」日本人の姿として捉えていたのである。

「スクランブル交差点での傘の群舞」とは、一人ひとりの行きたい方向はそれぞれだが、互いに他の人のことを思いやって、全体として一つの秩序を生み出している日本社会の見事な象徴である。そこには一人ひとりの自由と、共同体としての秩序が共存している。

我が国は、はるか太古の時代に「大和の国」、すなわち「大いなる和の国」と自称した。アメリカか

ら来た老夫妻が見た「スクランブル交差点での傘の群舞」は、まさにこの国柄が現代にも息づいていることを窺^{うかが}わせる。

この頃、古くから持っていた我が国のこうした他者を気遣う思いやりの文化も薄れつつあるように思っていたが、こうした目で日本人の姿を観察している外国人がいるのである。少し気恥ずかしい思いがしないわけではないが、正直、嬉しいし、少し頑張らなければならないような気になる。

世界有数の経済力も技術力も、「大いなる和の国」の静かな美しく過ぎゆく日々がもたらしたものと決して無関係ではないと思うのである。

「大いなる和の国」が成り立つのは、「大いなる和の国」に住む一人ひとりがすれ違う相手のことを思いやる心を持っているからである。この理想は、聖徳太子が「和を以て貴しとなす」として、十七条憲法の冒頭に掲げられたものであります。我が町内会の運営もまた同様で思いやりの気持ちがなくて成り立つものではありません。改めて、「大いなる和の国」の精神に立ち返ろうではありませんか。



「会員名簿」作成についてのお願い

お互い顔が見える町内会として、田中野田町内会の「会員名簿」(平成21年度版)を作成することになりました。個人情報の流失が厳しく問われている今日ですが、趣旨をお汲み取りいただき、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。